

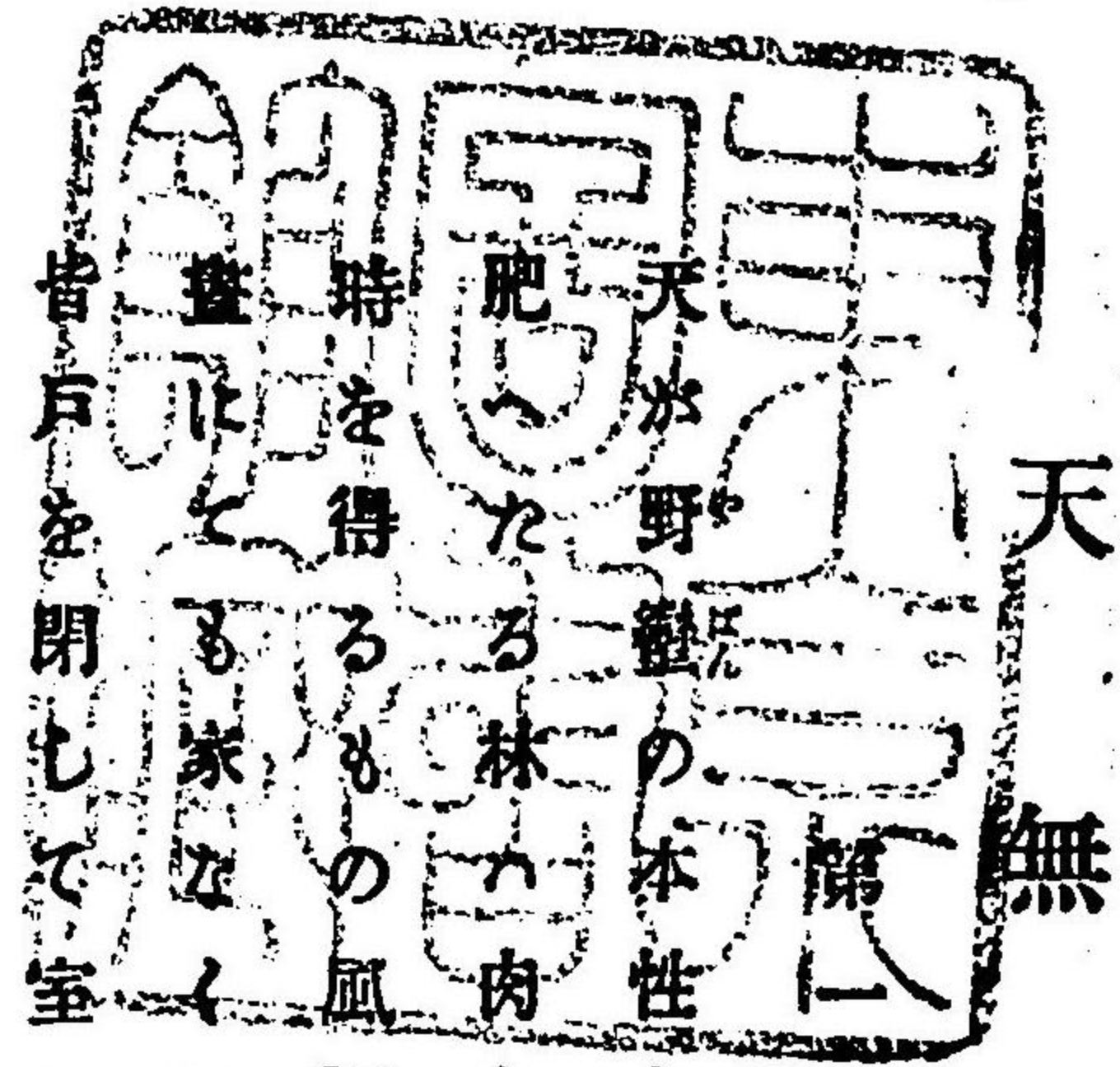
天
無
情

天
無
情

- 第一 此世
第二 懐にミルトン集
第三 母への何處
第四 人情 || 平等
第五 未死魂
第六 は、きいの心も知らず
第七 過去の壓抑
第八 現在の限制
第九 情の力
第十 戀
第十一 離れて切れず
第十二 前途何かある



特18
700



天無情

此世

天が野蠻の本性を現はそ、冬あり、色ある楓は散らされぬ、
肥たる林の肉を殺がれぬ、やさしき虫は泣死に殺されぬ、
時を得るもの風雨霜雪
盡はる家なくては防ぎ難きに、まして夜、まして夜半、人は
皆戸を閉して室の中に籠りぬ

此時家あきものあり、四十餘りの女、七歳ばかりの女兒、今や
四谷通を西の方より來りぬ、其顔は青く、其身は瘦せたり、か
ぶり物もなく、はき物もなし、唯一枚の襦袢
あられ二人は天物の餌食、風ハ身を噛みぬ、夜寒ハ骨を穿ち

ぬ、氷りたる泥の足を刺しぬ、餓と疲れの内より攻めぬ、堪へ兼て少女が

二

「おつかさん、苦しくつてまう歩かれまい」

「さうだらう、此二三日の何も食べまいから、こゝらの家を頼て見やう」

大きさに見ゆる家の門に立寄り、力なき手に叩きぬ何の答もあし

再び叩きぬ、三度、四度

遂に音もせそ

眠れる町の醒めたる繼母よりも酷し

涙ぐむ兒の顔を見つめる母の心如何ありしぞ、小さき足より血の出るを拭ひやりて物も言はず、又二三町行きたる

が、唾も盡きて口の内乾き息をきるさへ苦しくなりぬ

「おつかさん、こゝらの檐の下でねやうじやないか」

「さうだ、何處まで行ても當があいから、さうでもしやう」

檐下の用水桶の陰に寄りんとすれば、飛起きて、吠ゆる犬、噛みも付かん勢、身は疲れても愛の疲れず、母の子を抱て力の限り走りぬ、友の聲を聞いて此處彼處に吠立る犬のこわさに、くさ、四谷門を入りしも夢心地なり、犬の聲全く止みたるを聞ずまして始めて子を下ろし、四方を見れば堀の端なり、立寄るべき陰もあきには、チラ／＼降來る雪、益々狂ける風、母の子の顔に吾顔當てぬ、涙と涙のそれる冷たさ

櫻田を過ぎ、日比谷の原をこも、忽ち人聲、見れば無數の馬車路を夾み、電氣燈の光りまばゆし、今宵の叻々館に夜會あ

三

りけり、遠く見てさへ暖かけある火の光、茜色の窓掛を渡りて、笑ひさゝめく男女の聲、音楽と共に聞これば、親子のあされぬ、この夢か、極樂か、夢に非ず、極樂に非ず、矢張此世、同じ世、同じ人

我知らず、走り寄れば、守衛の警吏が

「コラあつちへ行かんか、何をして居る」

雪の益々烈しくなりぬ、親子の誰ひなりともとがらんと、立歸せば又叱られ、今の頼みの綱も切れて、よぼく歩む姿、此世の人か、

「おつかさん、あふまいよ」

氷にまべりしか母の倒さぬ

「おつかさんく」

何としたりか起されば見の驚き

「おつかさん、おつかさん」

驟々轟ろき来る馬車一輛、將に過ぎんとして忽ち止り、ヒラリと飛下る少年、倒れし女の傍に走り寄て

「だうしたんだ、急病でも起つたのか」

自から抱起して薬を與へ、手早く外套を脱て肩にかけやり、背あどさすれば

「おつかさん」

可愛き吾子の呼聲に、やうく目を開きたるが、吾子の顔を見るや否や抱き占めて泣俯しぬ、

「もう良いか、危ない處だつた」

母の少年の顔をツツく見て、子を前にまへ、手を合してお

がみぬ、早物も言われず、はふり落る涙を拂て、再たひ吾子の顔を見むとせしが、あはれ、其儘前お倒れぬ

「おツかさん

おろく泣出そ子の聲も今は聞こえず、少年の胸の邊に手を當れば氷の如く冷かなり、涙おさへて、馬丁と共に屍を馬車に乗せ、寄らんとする子に向ひ

「おつかさんは寐たから内へ行く、お前ひ私と一所にかいで

「イヤ、私のかつかさんと一所に行く

「イヤ、私と一所に行けば面白いのを見せたり、甘いものを食べさせてやるよ

無理よ手を引て吻々館の中に入りぬ

巴里の寶玉、倫敦の花帽子、世界の貴品に身をかざる貴女エポレット、大勳章人爵を胸に光らす、紳縉、酔ひ、歌ひ、舞ひ、躍る其中を乞食娘の手を引きあがら、靜に通る少年、これ何者、青き顔、長き髪、瘦せたる姿、夢みる目、嘲けるが如き口付、其外も現れる、もの憂愁と痛恨なり、驚く士女に見向もせず、子を食堂に連れ行て、椅子の上に抱き上げ、菓子、果、肉、肴あれか、これかと取てやれば、子の少年の顔と食物とを比べ見て手も出さず

「サアおあがり、うまいよ

「たべても、よろしいの

このく赤き西洋菓子を口へ入れて

「あ、おつかさん何處へ行たろう、こんなうまいものが

あるのに

涙保ち兼て少年の顔を背けぬ

「秋月さま」

涼しき聲に願れば、二十歳計りれ佳人、先づ著しきハ慧敏を現とそ大なる目、快活を現ハそ櫻色の顔、背ハ少し高きに過ぎたれど、藤色の夜會服心地よき程身にかないて、立振舞のしどやかさ、これぞ一擧一笑に幾多硬漢を生殺せる、交際社會の女王、花野喜美子よぞありける

「今夜はよくいらつしやいましたね、とてもお出はあいかと思つて居りました」

「夜がねられませんかので時を殺しに」

「此兒はだう遊ばしたの」

「あなた方が踊ていらつしやる門口で凍死した貧民の娘を」

人を殺す寸鐵、佳人の俯むさぬ、

菓子少し、肉少し、盗むやうに取て食へて、今ハ飽きたりしか、椅子にもたれて眠る兒を秋月は顧みて、

「疲れて居ると見へてよく寐入た、次の間でねさしてやらう」

立たんとせれば佳人は引止め

「イエ私を抱て行てやりますよ」

金環かゝやく手をさし延ばして汚れたる兒を抱取り、次の小間に行て天鵝絨の長椅子の上よねさし、其身ハ倒るゝやうに椅子にかゝりしが、急に笑顔造りて秋月に向ひ

「アノ明後日の慈善會を致しままからいらつしやつて下さいませんか」

「慈善會、ハ、ハ、右の手で取て左の手で恵む、それて慈善、ハ、ハ、多く取て恵むよりハ、少ゝく取て恵まぬ方が余程慈善だ」

又も一打、佳人は涙ぐみぬ

部屋の戸開きぬ、入り来る人、年ハ四十前後、色黒く光りたる顔に口髭ハね上りて眼鷹の如く鋭し、これぞ威權あり勢力ある阪江重利と云ふものあり、二人を見て驚たる様子ありしが、先づ喜美子よ向ひ

「何か面白さうある話しですぬ」

「オヤ阪江さん、先程からさがして居りましたよ、何處にい

らつしやつたのです」

「それは私の言ふことさ、イヤ秋月さん、貴君に此處で逢ふとは意外だ、實に不思議だ、何と思ておいであすつた」

「枯骨から吹き出した屋氣樓はどんあ物か見よふと思て」

第二 懐にミルトン集

秋月孤三郎の履歴ハ断えざる争の歴史なり、彼の政府と争ひぬ、社會と争ひぬ、己の實父と争ひぬ

彼の父も成長の頃は習慣と争ふたる一人あり、されど固より改革の理想ありて争ふたるにハあらで、大勢の流に漂ふたるものなれば、勝て榮利を得るに至れば、忽ちち習慣の奴とありぬ、孤三郎は幼き時より感情鋭く、泣き笑ひ怒ること

人よりも激しかりき、不幸にして早く母を失ひ、父には愛なく家人は冷遇、逆らふものはあれど宥むるものあく、ぢらすものはあれど慰むるものあかりしかば、情火ハ荒くのみありて、果ては我慢とあり執拗となり不羈となりぬ、されば學校に入れど學友と合はず、教師と合はず、學力少しく進みて後は退て獨り學びぬ、かく天性の美しき處漸やく隠れて、不利ある處のみ現はれし代りには、社會の風習に染まず、俗教の感化を蒙らず、人法の束縛を受けず、其目よは貴賤あく、上下あく、制限を知らず、干渉を知らず、思は飛で常に理想の天國に在り、此親にして此子、親ハ子を解せざりき、子の親を解せざりき、進む年齢と共に、書を通じ、新聞を通じ、狭き境界を通して、世

を看れば、解し難きまでの不公平、人の樂は更に樂しからぬど人の悲は誠に悲しく、一夜ルーシーを擲て意氣激昂、書を讀むハ何の爲、學を修むるは何の爲、血あり涙ありあがら活きたる器械とあつて居らるゝかと、咄嗟又一文を舐して新聞紙又投じたるを始めとして、改革の一族幟を立てんとせし其時、親族の某、公使とあつて外國に行く事あり、父ハ何時になく笑を含て、「よき折なり汝も共に行き外交の事を習ひ他日立身の基とせよ、小子今より此不平等ある社會を改革せんと決定せり、相違天淵、父は怒りぬ、子の怨みぬ、汝亦法に背き上に逆らわんとするか、小子誓て人壽の爲めに節と曲げじ、此結果親子義絶とありぬ

今までの清き理想の境に遊びたるものが無一物にて現實の社會に出でたることなれば、人の心の裏に立所に知られぬ、輕薄、無情、殘忍、貪慾、醜^{みにく}き處のみ見えて美しき處見えず、天を衝く大志を抱て賤しき衣食の爲に苦しむ、古英雄を卑くしとする意氣を以て閭巷の小人に辱しめらる、幸にして天眞の活火艱難の爲に消へず、筆に口お抱く所の理想を説て止まねど、これ中々に其窮愁を増を基なり、口を塞がれしは幾度ぞ、筆を折られしは幾度ぞ、心に従はねども力及ばず恨を呑みしは幾度ぞ、失意の上の失意、物質的に進歩して精神的に退守せる此社會は矯激彼の如きものを容れざりき、愚と言われ、狂と言われ、暴と言われ、叛民と言われ、破壊黨と言われぬ

容れぬ世、そねる人、誰か強きぞ、三年ばかり経て父なる人のみまかりつ、孤三郎の一朝巨萬の富の主となりぬ、されど黄金肉体の快樂は彼の憤恨を醫するに足らざる、更に世の人の心の汚れを知らしぬ、昨日の輕蔑、今日の歡待、昨日の侮辱、今日の諂諛、昨日の襍褻、看たる乞食の中、今日はフロックコート着たる乞食の中、昨日の手にて盗む賊の中、今日は口にて盗む賊の中、昨日は足らざるより惡事を行て罰せらるる、罪人の中、今日の足り過ぐるより惡事を行て罰せらるる罪人の中、醜醜醜人間醜

第三 母は何處

萬家を見下と三層の高樓、上は十疊の書室、されど掛物あく

花活なく置物あく額面あく違棚あく、唯書、床の間にも書、机の上にも書、机の下にも書、壁の上にも書、其外にの自くら寫したる米國獨立の檄文が壁上にはりつけあるのみ、秋月は四更尙眠らず、傍よ臥す女兒の顔をッッ〜守りて

「丸で天人だあ、罪のない、飾のない、偽のない顔をして、えかし誰でも子供の時はかうだらう、それが生長するに従て、貪慾とあり、残忍とあり、輕薄とあり、果ては詐偽、嫉妬、戰爭、あゝ此世の人間の墮落場だあ、已もも一度子供になりたい、さうすれば母様もあいであさる。せめては母の顔ありとも思出さんと目をふさげど、少しも覺ゆず、見ゆるのは乞食の死顔。だが恐ろしい、踊て遊ぶもの、傍に凍て死ぬものがある

とは、如何に此世は不平等でもこれのまた甚しい、天の業か、人の業う、——人だ人だ、一方より多く取て一方に多く興るからだ、自然の分配を亂るからだ、自由競争が行われなにからだ、あせ改革の出來ないだらう、消た、消た、義侠の氣の消た、學を曲げて世にこび、うれで學者、節を賣り名を獲て、それで政治家、偽善を教ゆるのが道德と、天眞を枉げるのが教育とは、人が狂か、我が狂か、笑はれ、うしられ、憎まれても此膝の屈せぬ、此心の枉げぬ、

「あつかさん」

目を醒して呼ぶ女兒の聲に感慨を破られて秋月は願れば、子は不思議さうに四方を見まはし

「あつかさん」

「今連れて行てやるよ、だがお前は何處のものだ」
出石

「出石とは但嶋のか、そして何時東京へ来たの」

「昨夜来ました」

「何處をたよつて」

「兄さんを」

「其人は何處に居るの」

「わかりません」

「何をして居る人だ」

「知りません、一昨年だまつて内を出て行たざりたよりが

あいから」

「外に知て居る人はないのか」

「ありません、出石の家に居られさくありましたから、母様と二人兄さんをたよつて来ました、途中で母様が病氣になつて、それに金があくなつて、それからよその門口へ立て物をもらひ、晩には櫓の下でねて、、、、」

「父様のあいか」

「去年死で、、、、」

「ま／＼泣出して、おつかさんの」

「此方へれいで、逢ひしてやる」

手を引て下の坐敷につれ行き、母の屍の傍に寄て、蔽ひし白布を取れば、見の毛がりつき

「おつかさん、お起きよ」

二たび三たびゆり動かせども、おはれ魂あき体、抱き取りも

せず、答へもせず、兒のふりかへりて秋月の顔を見、又母の顔を見て忽まち、わつと泣出しぬ、溢るゝ涙を止め兼て秋月は慰めんにも言葉出でず、立て窓を開けば庭の干草に置く曉の露は誰が涙子、折しも空高く啼く雁の聲を、これ予魂魄天に還りし母に代て泣くにはあらずや

第四 人情 平等

此不平等の世に此處ばかりの平等の谷中の墓地、富みたるものも、貧しかりしものも、驕りたるものも、窮したるものも、此處にて一切無差別、塵、塵、塵、大塚高樓今何處、輕裘肥馬今何處、玉冠朱履今何處、耳を敬て、聽けば長松巨樹人間の小便を笑ふ聲蕭颯

されど此中にも見上るばかりの墓碑を立て、後世の記憶を求むるの値だにあき小事歴を石の面に留むるものあり、咄、何處まで虚飾を好むぞ

凍死せし憐れある婦は單純ある墓標の下に眠りぬ、よし願みる人のあくとも、誠を濺ぐ孤兒の涙に快よく瞑をるなるべし

かくて一月余り経て秋月の少女を伴ひ其生國但島に行きぬ、元住みし處の人に問へど食しきものゝ存亡の、通り過ぐる旅人よりも忘られ易く、さる人もありしかよく知らずと云ふものゝみ、まして兄の事など知るものあし、秋月之望を失ふひ、今は氣長く尋ねるより外あしと歸途又就きぬ、されど急ぎても詮あければ、路をがら勝景舊趾を訪て京都に

入れば、春風我より先に名所の花を見舞ひ居たりき

第五 未死魂

十六夜の明月高く天の真中に在り、舊都を守る山々昔忍ぶ
 か銀の被衣に隠れぬ、見下せば町は青き霧に包まれたるに、
 一きわ目だつ古宮殿、處々きらめく鴨河の流、かしこに黒き
 は糺の森にて、こなたに淡き舟岡山か、相國寺朦朧烟の如
 く、北野金閣看を共見せず、此處の東山の頂將軍塚の邊、夜風
 凄まじく古木を拂て、恨を月に訴ふる鳥の外の聲もあきに、
 秋月孤三郎の唯獨り草茫々たる間に立ちぬ、
 仰て月を看、俯して舊都を見下せば想の飛て源平の昔、兩朝
 織豊の當時にさまよい今の愁暫くの忘れぬ

「みれが昔の都か、これが英雄の争ふた餌か、小さきあものだ
 ああ、女子供の血の涙を絞り、罪もあゝ男を殺して犬の腹
 を肥した其目的はこれ、それも暫くの間、中には親を殺し
 子を殺し兄を殺し弟を殺し、そして時勢も逆て其身は破
 滅、今では琵琶法師の歌か子供の夜伽話、憐れあものだあ
 あ、しかしだまされて犠牲とあつた奴こそ尙憐れだ、丸で
 時勢の玩弄物だあ、酷い酷い、
 つまり人に名利の慾といふ弱身があるから、まかし彼等
 ばかりではあゝ、今も未來も、名利心のある中は此世の地
 獄だ、

あゝ静かあ夜、町は丸で墓の様だ、これを照らす月、あの清
 らかあ事、羨ましいいな、頼朝の首を斬て墓前に備へよと虚

空を攫て叫だ清盛の死骸も見たらう、貫く槍を握て無念
 と云た信長の聲も聞たらう、秀頼を立てると立てぬは卿の
 心一ツと恨めしさうに家康の顔を見つめた秀吉の最後
 もの予いたらう、あの冷淡な事、まかし情がある、人間の脆
 いのを歎いて居るやうだ

時は雲足早くありて幾度か月を遮ぎれば秋月は眉を擧め
 ぬ、忽ち一陣の風と共に小雨蕭々と降来れば、木陰をたど
 りて山を下るに、路暗く、はかどらず、からふして鳥部野に出
 たり

時に雨の尙止まねども、雲漸く切れて其隙を飛ぶ流れ星、何
 處に落つるかと思上れば、はらくとこぼれかゝる葉末の
 露冷かある手に叩く道の邊の草、怪しや前に當て朦朧たる

影法師、舌、闇に包まれたる墓碑ありけり
 忽爾笛の音、墓所の中に

秋月の思はず立止りぬ、
 足音ひりめて墓の間を聲する方へと尋ね行けば、溪に臨て
 松の下に、長き黒髪ふり亂したる少女一人
 秋月のぞつとしぬ、されど目を止めて看れば其美しさ、こぼ
 れかゝりたる鬢の端より現はる顔白さ過ぎて青みたる
 に、氣高き目元愛らしき口元、年の十五ばかり、人のありとも
 知らず余念なく笛を吹きさみたるが、再たひ雲を出る月を
 見上る目に涙ふるひぬ、吹止みて笛を帯はさみ、立上らんと
 せし時は、はじめて秋月と顔を見合はしたるが、驚く氣色更
 になかりき、秋月は會釋して

「失禮ながらおまたはだうしてこんな處に唯お一人」

「イエ一人でのあります、母も一所に居ります」

「エうれの何處に」

「そこに」

前をさしてよと泣くに、見れば新しき本塔婆一ツ

「うれではおあくありあつたので、さう御愁傷でそれよしても今時分だうしてこんな處に」

「近々東京へまいらねばなりませんので名残惜しさに毎夜此處へまいります、常々母が笛が好でございましたから、此前で笛を吹きまを母の傍に居るやうでさびしい事はありません」

秋月は目をしばた、きぬ、互にしばらくの言葉なし、折しも

東の空少し白みて曉の鐘の聲すれば少女の立ちて

「もう夜明でございませ、それではお先へ」

静々行きかゝれば吾知らず跡を付けて行く秋月、不圖ふりかへる少女、互に目と目見合ひしぬ

第六 はくさいの心も知らず

「庭の櫻が盛りでございませから、だうかこちらへ」

かく言ひつゝ、花野喜美子は秋月を導て離れ坐敷に通しぬ、此處へ八疊ばかりの小室にて、床には簾を掲げて雪を見る清少納言の密書をかけ、違棚には金縁の詩集、書卷など并へて其下には源氏物語の美しき箱入りたるを置きたり、庭にハ數十株の櫻、池に沿ひ山を圍みて林をあらしたるが、今

や春風に咲亂れて花片、時に坐の邊に飛ひ來りぬ
 花野の父は秋月の父と郷を同らし經歷を同らし爵位を同
 うせしかば親族の如く交りぬ、前年秋月の父の死去せし後
 數月にして花野の父も同じ途に就きたれども、喜美子の容
 貌才學の交際社會に女王の名を得て、前に變らす時めきぬ、
 喜美子の幼き時、掌中の玉と愛せられぬ、長して後の社交
 の花と稱せられぬ、恐ろしき人に逢はず、まゝあらぬ事を知
 らず、まして清少納言紫式部を讀み、バイロンを讀み、ペトラ
 アツを讀み、マダム、デ、ステール、レディ、モンテギユの書簡を
 讀て、有力婦人の真相を知て後の氣象いつしか天よりも高
 くありぬ、されば意を迎ふ舞踏博士、美術政事家誰も彼も退
 けて二十歳を過ぎたり、されど元より多恨多情、

一夜久しく見ざりし秋月に逢へ、これよ其人
 其高尙の風、凄涼の目、其情を現はす顔、これを包む憂鬱、あは
 れ喜美子は溜息を知りぬ

今日、秋月が歸京せしとて自かち訪ひ來りしかば、喜美子
 の喜ひ面に表はれ、手つから茶を進めあから

「如何でございしました、さうか面白い事がございしたら
 う」

「ハイ、塵ばかり見て居たのが、山や野を見て少しの愉快で
 した」

「嵐山や桃山の花は如何でございました」

「丁度満開でしたか、何處も同じ雑沓で、折角は美景を損ね
 ました」

「さやうでございませう、名のある花は丸で人の玩弄物ですわね」

「花ばかりではありません、名のある人もそんなもので、言葉暫く切れぬ、喜美子の立て柵より畫帖の如きものを取

出だし、秋月の前に置きて
「これの先達て英人から聞きましてこしらへて見ました
姿と心の寫真をございます、朋友おも頼みまして集めて
置きました」

秋月の取てこれを開くに、右に其人の寫真をのさそ、左に
次の如く記しあり

花
櫻

吾最愛の
樂天然 親友と談話
詩人 書 時 候 浦景色
源氏物語
パイロン

秋「わあなたもパイロンがお好きでせか」

喜「ハイあの高尚な處、あの愛憐な處、あの情の厚い處、實にい

半の言さし秋月を見て顔を赤めぬ

次を開けの意外、鳥部山にて深く目に刻みたる少女の寫真、

其時は振亂したる黒髪今の美しき束髪にしたるが、其目、其口、彼あり、彼あり、心の寫眞の

の愛最吾						
詩人	書	時	候	天然	樂	花
ミルトン	神女談	夕暮	秋	秋の野	音樂	梅

嗜好を見れば我空想に暗合するも心嬉しく

「これはどなたです」

「それハ私の親友て阪江浦子とおつしやるお方」

「阪江、阪江とい」

「あの阪江重利様の御養女で」

無殘、一目相見てより如何にして忘れんとして忘られざ

りし彼少女ハ吾政敵の娘ありとい、知らずして思ひたるハ

おろかなりき、断つべし、忘るべし、されど尙思ふハ何故

「元ハ何處の御生れをき」

「京都ださうで、御兩親にお別れをまつて、おたよりなさる

處がないので、此度阪江様がお引取りにあつたのせでさ

いまき、それハくやさしい、清らかなお方で、飾りあそと

少しもありません、それハ情か深くて此間お母様のおま

くありあすつた時でも余りお歎きあすつて人と氣がちがったかと思つた位ですと」

何氣なく言ふ喜美子の言葉は秋月の情火を扇ぎぬ、折しも侍女が

「阪江様の御嬢様が見えました」

「今お噂をして居る處だ、こちらへお通し申して」

酷、思切らんとする矢先に其人、見じ、逢ふまじ

「私のお暇を」

「よいではありませんか、極心易く来るお方でそれから、それにまだ伺ひたい事もございませから」

秋月の脆くも坐にもどりぬ、此時侍女に導かれて静々浦子の入來りぬ、秋月の胸の波打てり、喜美子は先挨拶して、二人

を互に引合ひしぬ、浦子は一目見て顔を赤らめ

「あなたは」

「ホヤ御存じ喜美子が」

秋「ハイ、イエ、あの京都でお目にかゝつた事があるやうで、

、、、しかし何時此方へ」

「ハイ先月の末にまいりました」

喜美子は少し笑て

「東京とどちらがよろしうございませ」

浦「まだ馴れませんが分りませんが、何處へまいりまして

も故郷の事お忘れません」

喜「本當にさうでおさいませね、私の東京の生れですから、た

まに外へまいりまして直ぐ東京へ歸り度ありますよ」

此時侍女が入来りて

「前野様が見えました」

「オヤさうかへ、あちらの間へお通し申して二人に向て

一寸失禮致しませ」

喜美子の立て出て行きぬ、跡に二人は言葉あし

秋月の手持不沙汰にまたかの寫真帖を開き見しが

「ああなたも秋の景色が御好ですか」

「ハイ私は嗟嘆で生れまして、此間まで其處に居りました
うら、野の景色、山、池、川、の姿が、目に染みまして、殊に秋の夕
方などに眺めて居りませと互に楽しい話をして居るや
うに思ひました」

「私も天然の景が好きで、それに朋友がありませんうら、ます

「親しむやうにありました、しかし折があくて今だに
町の真中から狭い天を眺めて心ばかり遠く飛で居り
ませ、あなたは東京へお出にあつてから御朋友でも出来
ましたか」

「町の中では朋友あしには居られませんが、まだ一人も頼
もしひ人に逢ひません、夢でばかり廣澤の池や嵐山を見
て居りませ」

「しかし寂寞を歎て居たものが二人よつて、もはや寂寞
ではありません」

「二人の目は出合ひぬ、彼の此れに愛せられしを知りぬ、此
は彼も愛せられしを知りぬ、されど此歡の只一瞬時、互の間
柄に心付て秋月は青くありぬ」

此時喜美子ハ入り來りて

「まことに失禮を致しました、あの阪江さまを迎がまいッ
て居りますよ」

「それではもうお暇を」

「だか、まだよろしいじやありませんか」

「いえまたおぐります、さやうあらばあなをゆるりど」

歸る浦子を二人ハ送りて又元の坐にもどりぬ、

此時日暮れて西の空はこがね色とありたるに、東の方は全
く暗くなりて境別ち難き處、星のきらめき始むる、いと美く
し、庭の木立は夕やみにおほるげあるに、そよ吹く風につれ
られて盛過ぎたる櫻の花の亂れ散るは何處にや行く
喜美子ハ柵より源氏物語一卷を取りて見しよ、簾木の卷

「アノ空蟬ハ源氏中での貞女だと申しますが貴君ハだう
思召そ」

「貞女、あんのわれが貞女でせう信實伊與之助を愛して源
氏に従かハあかつたのあればいゝが、浮世の義理に據所
あくつれあかつた丈、眞の貞女とか孝子とかいふのは眞
に愛するものに限ります、中にハ名を得やうと思て愛も
あいのにそんな振をするものがある、教則ハ人を偽善者
としませよ」

「それでは源氏と若紫との愛は眞の愛でせう」

「源氏にあんの眞の愛があまりまきものか、眞の愛は一人に
限るもの、あんなに多くの女を愛するのハ愛を知らない
のでぞ」

「それで誰がお氣に入ります」

「皆氣に入りません」

喜美子は秋月の顔を、かの能辨ある目にキッと見て

「で、どんなのがあよろしいの」

語は一句、意は無量

「社會の塵に染まぬ清らかな處女が」

あはれ流水落花を載せて行かず

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

喜美子は始めて不如意を知りぬ、天下の我物と誇る政事家も榮華も飽きたりと驕る貴族も已れには腰を屈めて阿諛を競ふ、其中に彼何者、昨日までの窮書生、今日とても失意の

少年、地位高く爵位高く權力あきくに、我に逆らひ我眞心を退

くるとは、憎くし、怨めし、絶交しようか

生憎に目を離れぬは其面影

あゝ君が情の一言の比へての名譽何物、富貴何物、勢力の抑も何物、

「だかお嫌ひなさる、社會の塵厭だ厭だ、もう社會へも出

まい、人にも逢まい、鏡を看るのも厭になつた」

此時侍女が二度三度物言ても聞かれざるに、あきれて立つを心つきぬ

「おに阪江伯からお使」

見れぬ目を驚かそ美麗の籠に翠翠といふ鳥の贈物、田舎翁が見ば、これも十戸中人賦と嘆じやをらん

されど喜美子はよくも見ず、別に添へたる阪江の手書を封切て讀下せしに、顔色俄かに變て手紙を寸々に引裂て捨てぬ

第七 過去の壓抑

著者の誰そ、著者の誰そ、人相寄れば先云ぬ、不平等社會と題する匿名著書は此時天下を震はしたるなり
保守黨は怒りぬ、吏權黨は怒りぬ、國家學者の怒りぬ、儒教家の怒りぬ、尙武論者の怒りぬ、干涉保護論者の怒りぬ、彼等書中に痛撃されたればあり、皆言ふ著者の誰そ
警吏の東西に走りぬ、活版所の周密に搜かされぬ、下宿屋は嚴重に調べられぬ、此書秘密に出版されたればあり、皆言ふ

著書の誰そ

こゝにも此書を主客相對して評するものあり、主人は阪江重利、客は風間武男といふもの
阪江には主義あかりき、されど其威權を好む心と國家主義を喜び、其改革を嫌ふ心の保守黨に與みし、其冷淡と微笑の地位を保ち勢力を得たり、風間の保主黨の壯士年將に二十七八、眼鏡く骨逞まじく眉間に一寸余の傷の痕あり、屢腕を扼するさま慷慨悲歌の壯士とい知られぬ
談話將に酣、阪江の髭を撫で、

「知て居ませか著者を」

風「だうも分りません、當時こんさ文を書くものは反對黨にありませまい」

阪「秋月孤三郎さ」

風「秋月、あの暫く噂を聞かあかつた」

阪「方々探らしたら、たうく分かつたて」

風「さうでござりましたか、成程さう聞け、彼奴の文癖も見

えませ、」

阪「今あの位極端論を唱へるものはあの男の外に、あいて、

あに、しても困たものだ、大分行られると云ふから」

風「さやう、余程よく手をまひして廣めたものと見なませ、」

阪「實に困る、輕卒の輩を誤まらせるうらなわ、それに末の方

の論などの吾國固有の國体を破壊しやうとせるものだ、

國賊と言て善いさ、」

風「國賊、殘念でござりまする、其儘にして置くのは、」

阪「法律位いて罰した處が益々激して他日どんな論を吐く

かも知れまい、どんな事をやるかもしれまい、自分おやら

ぬ處が誤まッて其志を行ふとせる奴があるかも知れあ

ら、」

有力者の一言は開くもの、に十言、風間の腕を扼して憤る

色あり

阪「歎息するのには社會の制裁が弱い事だ、歐洲ナニ我國でも

昔の中々厳しかつたこんお奴の活けて置かあかつた位、

これの實に神洲の元氣だから、衰へたね、彼奴如きに蹂躪

されるやうで、元氣のあるものは一人もあいのだ、」

「お暇を致します、風間の突然立ち上りぬ、」

「まあよいのであいか、」

「イヤまた、しかしあの著者の秋月に相違ござりませんを」
「たしかにさうだ」

「さやうあらば」

風間は辭して外に出でぬ

* * * * *

儒教の故か、舊史の故か、有力者の教唆の故か、刺客を義士と
稱する社會の故か、風間の秋月を暗撃せんと決定しぬ、
されど固より私怨あし、されど私怨あき故に義なり、俠あり
されど此事最危し、されど危き故に勇あり、壯あり、風間は暮
るゝを待兼たりき

初夜過ぎぬ、二更、三更、時打つ鐘を聞すまじ、祖先より傳はり
たる利刀を懐にして秋月の邸に忍込みぬ、見まわせば正面
又玄關あり、其横に庭口あり、これより内に入て見るに、月は
恰も雲よ入りしが薄明に木立築山おぼろげに辨へらる、風
間の通り抜けて奥坐敷と見ゆる處を廻り見るに、堅く鎖し
たる戸の隙より燈の光洩れ出でたり
確かにこれ、されど何處より忍入るべき
忽爾物音、風間は思はず跡すさりぬ
されどよく見れば風の爲に栓を忘れしか、小さき切戸の明
きたるなり
風間の勇みぬ、此處より入れと云ふかと思て
潜りて入れば障子の外、内には燈の光暗し、風間へうと開か

んとするよ堅くしてきよと音をためらいて耳を軟ければ
 家内全く静かなり、ふたゝび試るに此度の静かに開きぬ、一
 足ふみこみて、見れば目前、彼、國賊、秋月の眠てあり勇氣百倍、
 風間は將さに進まんとを、少しく隔てゝ臥すものあり
 暗き燈の光に伺へば向をむきたれど小兒あり
 今の斷然、短刀を抜く途端、アツト叫ぶ小兒の聲に機を失て
 思はずも屏風の陰に身を隠しぬ
 秋月も聲に醒めたり

「どうしたの」

兒の秋月の顔を見て

「そのいゝ
 夢でも見たのか」

「夢、あの夢でしたか、こわい夢
 どんな夢」

「おつかさんと二人雪の中を歩いて居ると向ふから兄さんか刀を持って来ておつかさんを殺さうとするの」

「去年の十二月の事が余程頭に染み込めて居ると見える、其等た、あの時己れが通らなかつたらお前もおつかさんと一所に凍死する處だつた、まかしおつかさんは私が葬て快よく墓の中に眠て居るから、まうそんな事ハ忘れておしまい、兄さんと言ふのハ顔をよく覚えて居るか」

「覚えて居ます、こわい人、出石に居る時分余所の人と喧嘩して眉の間に傷があります」

風間の頭ハぬ、そと屏風の外に首を出して小兒の顔を見て

青くありぬ

思ひきや妹、ありけり

二年以前國の爲めに家を捨て、東京に來りし後、絶て消息を聞かざりしに、母の凍死、父は如何にし給ひし、妹は此處に助けられて、母も葬られて、助けし誰、葬りしは誰、秋月、國賊恩、仇、仁義、姦賊、母、妹、國、孝、忠、一時に腦中に戦ひぬ

謝すべきか、斬るべきか、國を如何せん、母の如何せん、風間の室を走り出てぬ

庭を抜けしゝ、塀を越へしか、更に自から覺えざりき、右に行きしか、左に行きしか、更に自から覺えざりき、只思ひぬ、迷ひぬ、苦しみぬ、

國を愛するの情の親を愛するの情、忠を教ゆるの情、信仰の孝

を教ゆるの信仰、風間の情に厚きより信仰に厚かりき、されど其責むるの一樣、親に事なき内の少しの不幸も、忠國の爲に忍びたれど、已れの不幸によりて、流浪窮死、罪あり大罪あり

大不幸を償ふは大忠義、されど今までに寸功なし、唯此の一擧、國賊を斬るの一擧、無殘、其國賊の吾恩人、吾に代りて母を葬りたる恩人、妹を助けたる恩人、此人なくは母は路上の骨、妹の餓死の鬼、

さらば此儘に止むべきか、邪説、詭辨、國家を如何せん、後世を如何せん

士氣腐敗と、阪江氏の言のれぬ、吾も生を偷て腐敗の徒と伍すべきか、

母を死せしめたるは我、母を葬らざるは我、妹を餓しめたる
 の我、國の大事を傍觀するの我

大不孝、大不忠

折しも曉を告ぐる鐘の聲、罪人を呼ふかと思はれて見まわ
 せば、短刀の抜きしまゝ、尙手に在り

「死」

心決まれば少しく落付きぬ、さて後事を如何すべき、先秋月
 に謝せべし、母の墓前に謝すべし、妹を受取るべし、されどこ
 れより誰に托せへさか、吾交友の皆貧あり、我に残すべき財
 産なし、再たび秋月、否如何で彼國賊に、然り、然り、阪江氏に托
 さん

諸事一決復た迷はず、急て宿所に歸りて衣服を改め、再たび

秋月の家に行きぬ、先きに賊のまねして塀を越へたれ
 ど心の勇みぬ、今の公然門より入るに足進まず、やう
 く玄關に至れば老僕出で、來意を問ふに、名刺を出して面
 談し度由云へば、直に客堂に通されぬ、待ッ間もあらず、秋
 月の静かみ出たり、風間ハ一目見て首を下げぬ

先ッ母の事、妹の事、幾重にも謝辭を述へて、已れの其子其兄
 あるよしを言へば秋月ハ驚き又喜び、直に少女を呼て對面
 さしぬ、先にハチラリとしか見ざりしが、さて瘦せたり、か
 かりたり、これも我ハと思へば、臉まへいッしか重くありぬ、
 父の事を問へば我出で、より數月にして死し給へりとい
 ふ、いよく不幸、母の墓所を問ひ、さて妹ハこれより引
 つれて歸り度よしを言へば秋月ハ快よく承諾して

「失禮だからあまたの御身分の」

「私は、、、、、まだ無職業で居ります」

風間は實を言わざりき

秋月は親切に、さらは何ありとも計り給へ、及ばきながら力を盡さんあと言ひるゝ苦しき、やうく辭して己が家に歸りぬ

同胞相別れて幾年月、わづかに逢へば又永別、言ひ度事胸に満ちて一言も出でず、好めるものを買てやり、喜ぶさまをツクく見れば、思はず涙目に満つるを未練と拂て、机に向ひ阪江に宛てし遺書を寫しぬ、されど詳しくは事情を記さず、唯妹の事を返さく頼み置、筆を投て溜息つきぬ、手箱の中より己が寫具を取出して妹に與へ

「これの私の、、、、大事にして持て居ておくれ」
妹は何氣なく笑みて懐に収めぬ

「そして此手紙を以て此名宛の家まで行て来ておくれ」
「此儘置て歸てもよろしいの」

「歸るゝ、ゝ、ゝ、それでいゝよ」

「急いで行て参ります」

「急があくつてもいゝ、怪我をしてはいけあいよ」

走り行く妹の姿障子の隙より見送れば偶々逢ひし珍らしさに屢々見かへるいじらしさ、父に別かれ母に別れ、今又兄に別るゝとの、逝く我よりも留る不幸、あき後おて何とすらん、生きては一日も養ふ能はず、死するに半銭だに殘す能はず、不孝の上に不慈、死してくれよと一言だにわから

さまに言われぬとは
 思ひ切て身を繕ろひ、人を斬らんとて出せし短刀、我を殺さ
 んとて懐に入れ、しほくとして宿所を出てぬ
 此夕谷中の墓地に若き男の或る墓の前にひれ伏すを見し
 ものありき、されど其次の朝の影だよも残らざりけり

第八 現在の限制

情を知る敵は情を以て防かれぬ、情知らぬ法の如何にし
 て
 不平等社會を秘密に出版せし活版所何處より現はれけん
 印刷人の捕はれぬ、著者の秋月との事確かに定まりぬ
 捕吏未だ到らず秋月の先づ知りぬ、これを告げたるの荒

河五郎とて急激家もて知られし人と前野平造といふ近頃
 知りし有志家あり

荒、また御存じありませんか、顯はれましれど秘密出版の事
 の印刷人の白状で、いよく政体變壞と二罪で告發し
 たううです

前、ああたのこれまで有力者に恨まれておいでござるから
 此度の非常に危い
 荒、だうござるおつもりですか、これを防くといふお考のあ
 りませんか

秋月のいふかしげに

秋、防ぐといふうして

荒、吾黨の首領とあるのです

秋「わあ、たの黨派と」

荒河「膝を進めて」

「吾黨の改革を目的として集た團體で、未だ公然と現はれあかつたの適當な首領がなかつたからで、今や時節到來しました、わあ、たが首領ふふなり下されば、それこそ驚天動地の大活劇がやれます、社會の積弊はもはや尋常の手段で改革は出来ませんが、先には平權論を説いたもので、今では已れの地位を失なうまいとて秩序とか禮義とか虚飾で後進を隔てる有様、何處か我々の力を用ゆる處が、ありました、まして保守黨の時を得顔、生産の社會に軍隊の風習、自由の天地に封建の教則、纖小の技藝に誇り、偉大なる新思想を起すことを知らず、徳

川末路の風俗を以て吾國固有の國風と、つまりは進歩を嫌ふ頑固の迷信、いつまで看過して居られませう、成敗は天、俗物の膽を破る大事業をやらすは我々の義務に天職に背くではありませんか」

「そして其手段は」

荒河「聲を潜めて秋月にさゝやきぬ、秋月の眉を擡めて」

「一体此目的は何で」

「これの意外のお尋ね、言ふまでもなく自由で正義で」

「正義の爲めに働くものが不正の手段をやつて」

「イヤ正義の目的の非常の手段を許します」

「不正の手段は正義の目的を誤ります」

語暫く絶えぬ、荒河は腕を扼して

細節にかゝわるのは俗物の事、利害を計て爲そへき事を爲ぬは卑怯者の事、おまたに最も不似合ではないか、ましておまたに既に網中の魚だ、網を破るに手段を問て居られやうか、おまたに一卷の著述で十分と信じて居られるか、知らぬが、言論文章の効力あるの、歐米の事では、此鈍い社會も何の影響があらう、口より手です、今の患の言ふものがあるのではない、爲そものがあいのだ

秋月の心の道理と感情の戰場となりぬ、退かんか、自由を失なふ、進まんか、潔よしとせず、よしや潔からそも其目的の自由、多年の苦辛は只此爲、富を捨て利を捨て名を捨てしも唯この爲、ブルヌス此爲めに

友を殺しぬ、シロムウエル、此爲よ王を斬りぬ

されど今行わんとする手段は不正、不正に成るもの、不正に敗る、まして此舉成算なし

否々成敗を計て逡巡するは怯かり弱かり、よしや一敗地に塗るも此積憤を驅れば足れり、此余勇を驅れば足れり、大勢の流に鞭て天下の惰眠を破れを足れり、

されど正義の爲に不正を行ひ、大道の爲めに非道を行ふ、かゝる事ハムデンのせじ、ワシントンはせじ、

さらば止まんか禁錮の恨

前も谷、後も谷、立つ處また動く

進むべきか退くべきか

秋月の腕を隠て前を見つめぬ

「あゝ僕ハ運命の繼兒、事業ハ成ラセ目的ハ敗れた、唯一
つ満足せるのは今まで良心に反した事をしあかつた事、
今これも失ふに忍びません」

「荒、それでは甘して自由を失ふつもりでるか」

「秋、イヤ人法の束縛あひまう飽きました」

「前ではどうなさるお考」

「秋、自由のある處吾住家です」

第九 情の力

秋月孤三郎氏身を隠くしたりとの一報各新聞紙又現はれ
し時の誰も彼も驚きぬ、されど最も驚きたるハ阪江の養
女浦子なり

浦子のいとけあき時の幸福ありき、否不幸の何たるを知ら
ざりき、花を友とし、鳥を友とし、山水を友として春秋を唯夢
と過しぬ、父の死去ハ涙の始、されど母あり、只一人の親、只一
人の子の分たぬ愛に心細さ漸く忘れんとしたる折から、こ
れにも先立たれて今ハ獨り他人の中、馴れし故郷の山水に
さへ別れて塵深き都會の中、浦子ハ闇の心地したりき
たちまち光、闇を照らすうれしき月光

浦子ハ新しき夢を見ぬ

此夢にハ苦あかりき、此夢は清かりき現ハ美しき夢を破る
と知らぬハ、卑しき慾は美しき夢の中に動くと知らぬハ
あハれ、此夢は短かりき

驚かされて見れば、争鬭、壓轢、法網、逃亡、

現まとは是か、否浦子は恐ろしき夢と思ひぬ、されど此夢遂に醒めず

驚定おどろきて愁うれ、愁極きまて涙、晝たの溜息なげの絶ゆる時なく、夜は忍び音に泣明せど慰むるものだにあり、常より弱き身、重き苦も堪へ兼て病の床に臥せば枕復た上らき、情をさぬ薬、心を知らぬ人の介抱に重くのみありて今、只墓場の前、されど少しも嘆かざりき唯嘆くは秋月の事

「それで、いよゝゝお行衛の知れあいのかねへ、今まででもお目にうつる事少ないが、同じ土地にいらつしやると思へば心丈夫に思て居たのに、何處へお出て遊ばしたか、もしやこれざり逢へれあいか知らぬ、さうあれば何を樂しみよ活きて居やう、わゝ死ぬまでにも一度

お目にかゝりたい、先月余所から頼っていたゝひた此寫真もこんな事にある前ま徴か

肌はに付けたる秋月の寫真を取出し、見れば見る程慕したひしく思はず涙ふりかゝるに袖にて拭へば又ぬれて、果ては顔に當てゝ泣俯しぬ

「お嬢様、秋月様を呼でまいりませうか」

驚てふりかへれば過ぎし頃より此家よ養はるゝ風間の妹霜あり

「オヤ何時來たの」

「先程まいりました」

「お前聞て居たかへ」

「はい」

浦子の少し顔を赤めぬ

「そして秋月様をお前知て居るの」

「ハイ暫く秋月様のお邸に居りました」

「エ、それ何時、どうして」

「去年はじめて東京へまいりました時、おつかさんが死で、
い、い、困て居た處を助けてもらひまして、暫らくお邸
に居りました」

「そして今でも行く事があるかへ」

「イエこちらへまいつてからは行た事、のわりませんが、は
んどに好いお方、私、兄さんより好き、いつでも行て
まいりませう」

「でも今はお邸においでなさらあいよ」

「それも私か行て聞きましたら分りませう」

「よく言ておくれだ、うれしいよ、だうぞ頼みます、」

「じゃこれからすぐ行てまいりませう」

霜しもの急いそいで出て行きぬ、如何に成行く事にやと浦子の心つ
かひに病苦を忘れて、新聞紙を取りては置き、置きては取り、
同じ處を幾度いくばくとあく讀下せど、心には少しも入らそ、待てハ
又生憎に人の歸りの殊の外とと遅おそき心地して、障子に映る鳥の
影もそれよハあらずやと欺あざむかれしの幾度か、堪へ兼て椽
側に立出れの庭を隔てたる坐敷に當て、秋月あきづきと言ふ聲聞ゆ、
耳を留むれば父の聲にて

「だうだ分つたら、居處いどころが知れない内うちのまことに不安心だ」
「イエ實ハ過日荒川と一處に訪ひました時、荒川が暴擧の

事をいろ／＼と勸めましたが、どうしても同意しません
 でした、私の見た處では勇氣や野心は全く消て居るやう
 です」

「イヤ／＼あのはげしい感情が消るといふ事はあゝ、何時
 破裂はくちやくするかも知れあいて、そして荒川の方は大丈夫だあ
 りれは大丈夫でござります、あの男ばかりで事は起され
 ません、此間の秋月の語氣ごきで、海外へ脱だつ走る様子でした
 が、たしかにまだ出ません、多分、横濱の山の手二百番に
 忍て居るだろうと思ひませ」

「さうか、これららきぐ行てくれあいか」

「かしこまりました、十分探てまいりませう」

「あの花野に久しく逢あひんぐ、近頃はだういふ様子だな」

「余程變かです、女王の冠かんむりを捨てた有様です、何でも秋月と
 の關係かららしいようでござります」

「じやいよく／＼だあ」

浦子うらこのそと内に入て息をつきぬ、さて、いかの人の横濱に
 忍てゐるか、さるよても御身危おんみし如何すべきとわづら
 ひしが、猶豫うごちする處に非あま、我先行て告つひげやと、手早く衣服を
 着かへて出でんとする勢、病は何處いづく

折しも霜しもの走り歸りぬ

「お嬢様、只今歸りました」

「だうだつた、早く様子を」

「やつどの事で分りました、始めと留守番の七助さんも隠
 して居りました、が、貴女の事を申したら首てくれました、

そしてお手紙もそぐ持て行てわけらつて、出て行きました
たよ、お處の横濱の居留地二百番」

いよ／＼それ、浦子は立て行かんとぞ、霜は驚き、

「オヤどちらへ」

「私、これから横濱へ行きませ」

「そんな事をなすつたら尙おあんバひか悪るくあります
よ、お庭先でもおひろいがむつかしいのに」

「イエ／＼、大變お事が出来たからこれからすぐ行きませ」

「じゃ私が、お伴を致しませう、お手を取りませうか」

「よろしいよ」

言ひつゝ、浦子は先に立て行けは、昨日までは起上るさへ容
易ならざりしにと霜の驚きぬ、裏口より出で、車に乗り

新橋の方へ急ぐに先へ馳する車あり、もしやと見れ、客
の前野、かれ先立てゝ、いと車夫を急かせとも、彼の健脚此
の老足、追越兼て新橋に近づけは、出車の鈴玲瓏として鳴り
ぬ、胸轟ろきて身は顛へど、飛ぶものは心ばかり、前野の
車は早くも着て、御車に乗る様子に、たまり兼て車を飛下り
走り出せば無慘、今半町ばかりにて停車場の戸鷲々として
閉りぬ

口惜しく、恨めして、憎らしく、浦子へ出て行く瀧車の方を睥
て涙ぐみぬ

「仕方がない車で行かう」

「そんな事をしつたて次の瀧車で行く方が早うございま
せよ、だか此處に待て居ては内の人に見付かるといけま

せんからあちらへまいりませう」
芝口の方へ行かんとする途端、家令馬丁等追かけ來りて避
くる間もあらそ

「やうく」の事で見付た、さあか歸り、お邸の大騒で、うれお
車を」

無理に車に乗せんとするを浦子の振拂て走り出しぬ、追
手は驚て跡を追へんとする其時、數輛の馬車引續て横の方
より馳せ來り間を遮る其暇に浦子は辻車に飛乗て品川の
方に走りぬ
尙も追來らんかと心の空を行く心地、やうく停車場に
着けど出車の時未た來らぬ、此間に追付かれんかと、胸さ
わぎ、足ふるひぬ

辛うじて來る瀧車

此時馳せ來る追手

浦子は飛ひぬ、瀧車は動きぬ、追手の残りぬ

されど今日に限てまた生憎に道の長さ、横濱に着けぬ大
時計午後五時を報じて街燈漸やく光を放つ頃ありけり
霜よの別れつ、處の案内は知らず、只居留地の二百番どバ
かりを心當に尋行けど莊園門巷多く相似たる山の手の急
に知れぬもどかしさ、果ては心細くあるを自から勵まし、
此處かしたこと尋ねあるきぬ、此時日暮れ果て、垣根の花
もおぼろげあるに、誰が家の兒、ひきあらずピオリンの聲
身に染みて哀はれあり、會堂の前を過ぐれば讚美の歌洩
れ聞えて物悲しきに、見上れば一點二點滴らんとする星の

涙、雲の上にも憂き事ありけるにや

本牧近き處、離れたる一軒屋あり、竹垣高く仕まはしたる上に繁き木立に包まれたるが、隙洩る燈の光に見れば二百番、うれしやこれよと浦子の今までの苦を忘れて其中に入らんとす、と見れば階の上に二人の男、互に問ひ又答ふ様子あれは暫らく外に伺ふに、一人は此家の僕と見ゆ、一人は無念、前野ありき

「イヤ私は大事なものだ、同志の中で前野平造だと言て下さい」

「それあらば申しませが實は先程までお出でいしたか東京からお使が見へましたら、そぐお出かけになりました」
浦子のわつと泣倒れぬ

第十 戀

浦子の事を聞くや否、秋月の直に出でぬ、隔ての關も法の網も情の目には入らざりけり、さをもと濕車にて行かば見咎められんと車を雇て街道を行きぬ、處々よて乗替て行方を知らさず、東京よ達せし午後十時頃あり、三田にて車を下り、それより先は徒歩して浦子の家に向ひぬ、此時月出で、光、生憎に晝の如きに道の片側にわづかばかり陰を殘せば秋月のこれに沿て行きぬ
白金のあたりを過ぐる折しも不圖警吏に出合ひぬ、されど引返さば却て疑を招かんと、それちがひさま顔を背けたれば立止て角燈に照しぬ
此方は態と歩みを緩くしぬ

忽まち靴音の近つき來れば、さての怪しみて跡を付くるにやど、漸やく足を早くして、幾曲り、道を折れて行けど、彼も亦足を早めて遂に失はず、見まはせば行手に當て小さき森あり

此時月雲お入て四方小暗うなれば、秋月の足音潜めて其中に入りぬ

顔をつく枝、足にまどふ草を拂ひかから、わづかに通り抜け、て顧みれ、復たつくものもあき様子に、胸を撫て下す其途端、突倒せやうに鳴る鐘の聲、數ふれば一時なり、人足全くたへて夜商の聲も聞はぬ共、吾を包む暗さは人も包むかと、にらみあがら行きぬ

忽まち火影、秋月の思はず立止りぬ

されどよく聞けば下駄の音なれば安堵して、それちがはんとする途端

「三田の方へのだうまいりますね」

ギョッとはしたれど、さあらぬ体にて、後を指さして過ぎんとすれば

「あなた、秋月さんじやありませんか」

見れば流涙の折同じ長家に住ひし男、秋月は聲を造りて

「私はそんなものじやありません」

言捨て、行かんとすれば

「イエれ見忘れあさいましたか、八造でございまをよ、暫く

れ目にかゝりません、唯今んどちらに」

「ちがひます」

尙も問ひかくるを聞かぬ振して行けば大聲に呼はるゝに
堪へ兼て走り出しぬ

かくて行くこと三町ばかり、細き流の邊に出でたり、見ま
はせば橋もあり、余りに人を避けて道をわやまりたるかど

秋月の立止りぬ

忽爾靴音、火の光、劍摩する音

此時月雲を出で、明光隈あく照せの秋月の姿は隠るゝ處
あく現れぬ

「待てッ」數人一聲

進退の谷りぬ、見れぬ道傍の家に開放したる切戸あり

秋月の飛こみぬ

跡を閉ちて見まはせは、廣き庭にて築山あり、泉水あり、木

立ものふりたる陰に月を光らす石燈籠、何處とあく見覺
のあるやうあれはよくく見るに、意外、これはこれ吾目
當なる阪江の邸ありけり

燈あかき小坐敷のもしや浦子の部屋にやと伺はんとする
途端、障子を開きて出るものあり、思はず顔を見合はせば
阪江重利、かれこれ等しく跡すさりぬ

阪江はチロリと見て

「賊だ賊だ、誰か来ないか」

賊、我を知りながら賊呼はり、秋月の嚇としぬ、手先に觸る
懐裡の短刀

思はぬ人お思はるゝのつらし、思ふ人に思はれぬの更に
つらし、喜美子のつらさ忘きんとて馴れし都の風流社會
を振捨て、京都奈良の昔の跡、須磨明石の浦景色、宇治の月、
吉野の花、勝景舊跡を見まはれとも心少しも樂しからず、
或日何に感じけん急よ東都よ歸り度、直に瀛車に乗て箱根
の此方まで來りしよ、又厭にありて大磯にて車を下り、濱邊
の旅宿に足を止めぬ

これよりいまた爲す事なく、松青く砂白き浦の景色を眺め
暮し、枕を叩く涙の音にねられぬ曉を傷みしに幾度か、家
に在りし日の一筋の亂れさへ許さざりし髪、今は半くだけ
たるもかまわず、自然を補ひし顔の色の衰へたるも氣に
留めず、床の花瓶にさしたる櫻の枝より花一片を摘取り

てもみつふしあがら、ホット一息

「あゝ何もかも厭にあつた、いつそ思ひ切て遠い處へ、さう
だ、洋行でもしやうか知らぬ」

折しも侍女が新聞紙を持來れば、懶けに開て見るに

「一大變事　　秋月孤三郎氏の阪江重利氏を斬て身を隠
せり、原因は未詳」

喜美子は思はず新聞紙を取り落としぬ、忽ち立ち上て慌
して侍女を呼び

「支度をしてゐくれ、今からすぐ東京へ歸るから」

第十二 前途何かある

夜來の風雨漸やく止みて、點滴の音靜かに、縁深き苔の上に

残る紅の一片二片散りたるも哀はれなり、三面竹に圍ま
れたる小亭に男女相對して語るハ秋月と花野喜美子あり
「此處は私共の別宅で門番の外に誰も居りませんから
御安心をまつていらつしやいませ、それにしても思も
よらぬ、今日の新報でハ阪江の傷ハ重いと云ふ
事、其れ故あたの詮義が一沙きびしいとしてあります
が、定めて御心配でございませう、私もあなたガ駈けて
おいで遊ばした時ハびつくり致しました」

「此度ハ一方あらぬ御厄介、私も行きが、りて止むを得ず
血を流しましたが、あの時あなたガね通りに
あらずば危かつた處、元より命ハ惜しみませんが唯一事
——そしてあハ浦子さんの事はね聞きにハありませ

んか」

「はい實ハ其事も聞きました、申してよいやら、いかいど
存じてひかへて居りました、浦子さんハ、あれ
あくありにありました、あハ日ああなたをたづねて横濱
へいらつしやいました、さうですが、丁度あなたハ入れち
がひになりまして、それをね聞きにハあると氣をお失なひ
遊ばしたとの事、前野といふ人が居合ハしまして東京の
お邸へおつれ申して歸りませど、お邸ではまたああなたハ
事で大騒ぎ、一時は氣か付きました、さうですが、前か
らのね弱りとお氣がくたけたので、たうく次の朝、
、、、、お可愛さうに存じます」

光明一時に消て黒鷲身を包む心地、秋月ハ暫く我を失あひ

ぬ、忽まち重き溜息と共に千行の涙はら〜と膝にかゝれば喜美子も顔を背けてぬるゝ目を拭ひぬ
 雨の又降出して時に窓を打つゝ襖くさかに隠れて啼く鳩きりこの聲も折よ合て悲しげあり、喜美子の秋月の顔をツク〜見るに、頬落ち骨出で、頼よの憂苦を刻きむ一字の皺しわ、幼き時の圓顔まろに笑え窪くぼ愛らしき其顔が此變りやうと、又も涙を催しぬ、秋月の新聞紙を取て見しが喜美子に向ひ

「花野さん、あなたの御親切の難有うございませ、此様子での此處又居りまして、あゝあなたにこんな御迷惑をうけるかも知れませんから、これから外へまいりませう」
 「それは少しも厭いやひませんで、それが此處も余り安全ではありませんから、あなた外國へでもお出で遊ばしては如何

てございませ、失禮ながら御費用は私共で取計らひませう、私も先達てから思ふ事がかあひませんので、何か社會が厭いやにありまして、いつそ亞米利加へでも行かうかと思ひませ」

言ひつゝ、秋月を見て顔を赤めぬ、此方へませ〜青くありぬ

「あなたのお志の死とも忘れません、唯々それに酬むかゆる事が出来あいのうたうぞ許して下さいませ」
 感謝を表はせ秋月の目の光喜美子の心を通しぬ、暫くして秋月は言葉をつぎ

「私も始めの海外へ出る考へで居りましたが、今のまう〜唯一ツお願がござりますが、お聞き下さりませか」

「どの様な事でも私に出来ませうら」

「私に少しばかり財産が残っておりますが、それを皆貧兒院にやつて下さい、今までの事業と一處で、何にもありませんが」

「かしこまりました、そしてあなたは」

「墓場へ行くのに金が入りません」

第十三 光明のなきか

血を濺ぐ夕日の色今や全たくに波に溶けたり
陸先つ黒くなりぬ、海は緑とありぬ、空は灰色とありぬ、
暮れ行くまゝに黒きもの縁あるもの灰色あるもの漸やく
合て、果ての一色無差別の闇

空に一の星だになし、海に一の舟だにあり、陸に一の燈
だになし、全く寂寞

時に寂寞を破るゝ水鳥の聲

時に闇を割くと閃電光

晝は静かありし風いつしか烈しくありぬ、晝は穏かあり
し涙いつしか荒くありぬ、鳴聲の叫聲となり、啼聲とあり、
果ては風浪相合て唯鷺々々

此處は房洲の海岸あり、蕭々として唯獨り波打際をたど
り來ると秋月孤三郎、抑々何處に行かんとするか、抑々何
處に止まらんとするか、行くべき處あり、止まるべき處
あり、松の下、岩の陰、森の中、草の間、止まりては行き、行きて
は止まる、止まるものゝ只彼の身、行くものゝ只彼の身

彼の心は行くべき處あり、止まるべき處あり。其歩は忽ち急み、忽ち緩み、右に折れ、左に曲りぬ、突如物あり、秋月のつまづいて倒れぬ、静に起上りて探り見るも、潮に濡れたる包物の如し、撫てまわせば、頸、鼻、髪、一打上げられたる溺死の屍

秋月は暫く動かざりき、忽ち身ふるひして走り出しぬ、又も袖を引留むるもの、人が、見れば二に折れたる磯折松

秋月はまた走らざりき、松の根に腰かけて、ほつとつく息長し

「まつ暗き夜たなわ、丁度己の心のやうだ、一の光もあらず、あせこれで活て居るだらう、命が惜しいのか、命

を延ばすのは苦を延ばすのだ、後の世が恐ろしいか、浦子と共に心を行て居る、何が己を止めるだらう——あゝ我々が憐れだあわ、去年までの古英雄を笑て居たのが、今で自分をも笑はねばならぬと、一個人の成敗は天の目に、はいらぬのだあわ——希望の失ふひ事業の敗る、命よりも愛する浦子にまで別れようとのだうしてこれが忍ばれよう、待てと言ふ宗教の氣の長さ、忘れよと云ふ哲學の無情、夢と誰が言た、夢をらば醒めよ、現あらぬ眠れ、死ぬ、此身と共に此悲、此身と共に此怒、世が己に墓とあつてから久しい事、廣い墓から狭い墓へ行くのよ何の恐れ、何の厭ひ——否々々、怒りに死ぬの敵に負けるのだ、悲に死ぬの運

命に負けるのだ、勝て、勝て、事は自由にあらずとも心は自由、希望は埋められても氣力まで埋められやうか――

三十余年の窮愁、憤恨、一時に秋月の腦に咆哮しぬ、忽まちありくと東都の光景、苦戦の處、激争の處、敵の滿る處、敵、

――我を苦しめし敵、攻めし敵、陥れし敵、刺し、敵――

忽爾天外飛來る黒風と共に海波吹上て、家を呑み寺を呑み人を呑めば、泣き叫けふ聲氣味よく、争て逃げまゐる大敵小敵、益々猛ける狂浪怒濤、果ては彼も此も盡く沈め殺しぬ、愉快々々、秋月は大笑せ、聲未だ止まざるに、余波進て其足を洗とんとすれば、驚て傍なる松の古木にかけ上りぬ、波尙止まず、益々寄せて松の根を浸し、枝を浸し、果ては秋

月の足を浸し、膝を浸し、腹を浸き折しもあれ、颯と吹來る疾風一陣、無慘、大木半より折れて、秋月の身は横さまに怒濤の上に落つるかと思へば、天地俄かに耀て明光一發、忽ち手を取て半空より引上ぐるものあり、誰ぞと見れば白衣長く纏て金髮風に亂れたる間より大理石の如き浦子の顔、驚き喜て抱付かんとする途端、手は離れて墜落千仞、アット一叫、夢か現か、依然として其身房洲の海岸、目を舉れば海静まり、雲少しく晴れて、殘月天の一方に青し

明治廿四年九月廿二日印刷
全 年全月廿四日出版

定價金二拾錢



東京市麴町區內幸町壹丁目五番地
片山正通方寄留

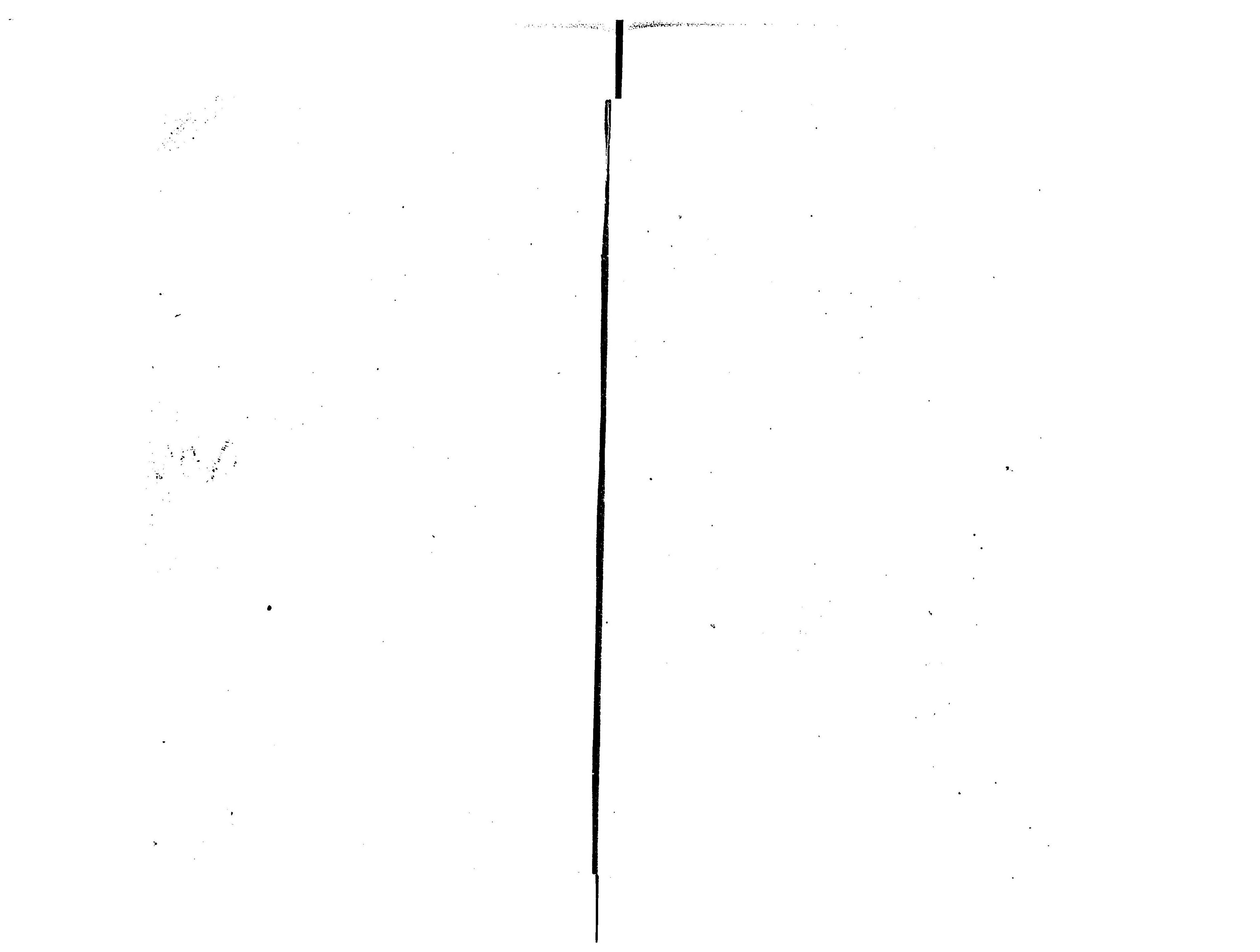
大阪府平良

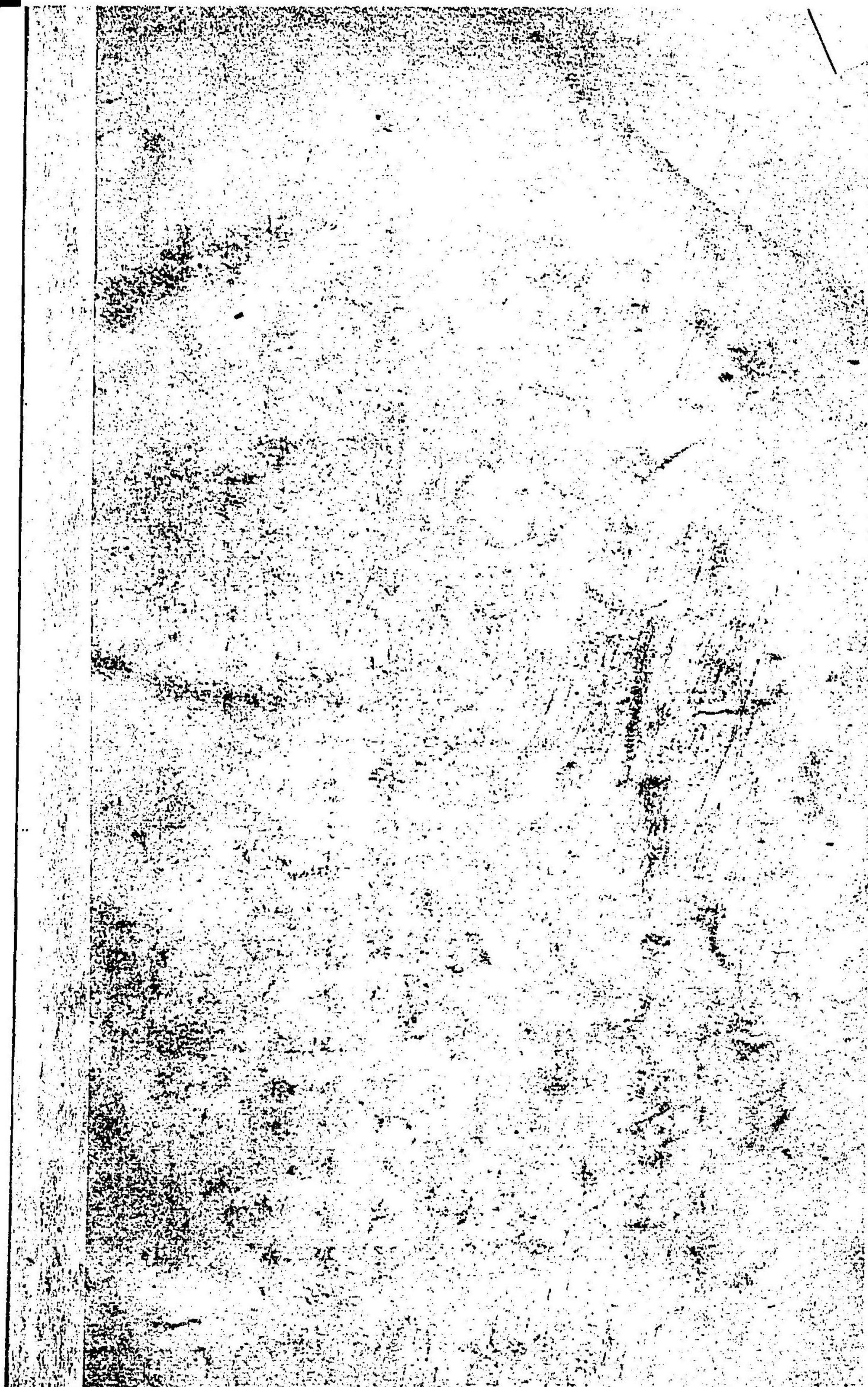
著者兼發行者 高安三郎

全 京橋區山下町八番地

東京府士族

印刷者 宇津木信夫





100-311000-1000
100-311000-1000

特 18
700

天無常
国立国会図書館

088054-000-0

特18-700

天無情

高安 三郎 / 著

M24

DBG-0151

